

# 乳幼児期における新しい時代の運動会に向けた今後の課題 — N市等の現状を踏まえて —

Future Challenges for Early Childhood Sports Days in a New Era  
- Analyzing about Current Situation of Sports Days in N.-City etc -

杉本 睦 洸 ・ 森 むつみ ・ 山 村 康 子  
Nobuhiro SUGIMOTO, Mutsumi MORI & Yasuko YAMAMURA

## 要旨

本研究は、運動会の本来の意義や現状を踏まえたうえで新しい時代の運動会の課題を明らかにする目的で行われた。N県及びK府O府の公私立の幼稚園・保育園・認定こども園を対象とした郵送による調査を実施し、20園82名の有効回答の運動会の達成度の統計的分析と全回答の自由記述の分析、および同法人系列の運動会前後の観察を行った。その結果、次の5点を明らかにした。①運動会は運動能力だけではない総合的な価値があることを今後も忘れてはならない、②子どもの主体性や保育者同士の協働性や同僚性に関する経験もできるようなプロセスを工夫すること、③乳児の運動会に関しては、特に身体表現プログラムにおいて固定的ではない柔軟な捉え方が必要であること、④熱中症対策を万全に講じながら行う必要があること、⑤感染症対策を講じた運動会における変化や工夫をふまえることで得た本来の運動会の在り方を意識化し、それと運動会で何を子どもに経験させたいか学ばせたいかという園の目標などの多側面とがマッチしていく部分を発見すること。

キーワード：運動会 乳幼児期 身体表現

## 1. はじめに

2023年5月、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）が2類相当から5類感染症に移行され、以前の生活が戻りつつある。それに伴い乳幼児の保育・教育の場である各種園所の行事の中で、一度途切れたものを元に戻して踏襲していく行事もあるが、特別に一考が必要な行事もあり、その一つとして「運動会」をあげられるのではないか。

箕和（2017）によると、日本初の運動会は、1874年（明治7年）、東京・築地の海軍兵学校で開催された競闘遊戯会であった。運動会はその始まりの時期において、身体を訓練する行事でありながら、家庭や地域とのつながりのなかにある文化的行事でもあった。それは地域的な生活世界においての村祭りとしての機能を持っており、運動会には多くの地域住民が見物に訪れていたという。現在でもこのような感覚の中で運動会が行われており、家庭や地域においての年中行事として色濃く残っていると言えよう。

柴崎（1992,1993）によると、幼稚園の運動会の起源は明治中期にあった。また明治時代の保育日誌の記述から「この頃の運動会は、遠足と運動遊びを合わせたようなものであり、軍隊式の行軍

と競技を行うことにより意識の高揚を図るという意味合いがあったようです」と述べている。実際に運動会において入退場の行進はコロナ禍の前ぐらいまでは、各学校・園などでも行われていた。

箕和（2017）は、明治30年代から地域の行事としての連合運動会が盛んに開催されるようになると、園児たちも地域の運動会に参加して慣習の前で遊戯をするようになり、いわゆる見せる運動会に変わっていったと述べている。

運動会の価値や意義に関しての変化として、柴崎（1992,1993）は、昭和初期には幼稚園の運動会は幼稚園独自の運動会を行い始め、大規模な運動会に参加して観てもらいより、規模は小さくても自分たちで無理なく自然に楽しめる運動会にしたいという努力が払われるようになったと指摘している。さらに箕和（2017）は、近年、保育時間の長時間化や、幼稚園の認定こども園化などに伴い、幼児にふさわしい経験としての行事の見直しを実施するような園や自治体も増えてきているため、東京の小金井市では、今から30年以上前から「行事っていったい何だろう。いったい誰のためのものなのだろう」と毎年のように行事の見直しを行っていると述べている。

岡澤（2023）は、子ども主体の保育の質の向上のためには、コロナ禍における運動会の実態を振り返り、運動会が何のためにあるのか根本的な模索が必要であること、さらに運動会のその日一日が活動の頂点として終わってしまわないように、日常の保育とのつながりの中で子ども達の学びの援助を続けることが必要な課題であることを明らかにしている。例えば、各園での運動会の身体表現プログラムの実施も、何のためにあるのか、日常の保育とのつながりをどのようにとらえるべきかなどの演目や方法に関する課題も残されているといえよう。

さらに近年、国連事務総長が「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰化の時代が到来した」と発言（国連広報センター,2023）したように世界の平均気温は上昇している。日本においても100年で1.35°も上昇している（気象庁,2024）。特に1990年代以降に高温になる年が多くなってきており、今後さらに高温になると予測されている。この事態は運動会の開催時期の選択や運営等に関して影響があると考えられる。

そこで本研究は、運動会の本来の意義や現状を踏まえたうえで新しい時代の運動会の課題を明らかにする目的で行った。

## 2. 方法

### 1) 調査対象

N県及びK府O府の公私立の26園所に、調査用紙146部を郵送にて依頼し回答を郵送にて回収した。回収数は96件であった。そのうち運動会を実施した担当クラスの回答82件を本研究の有効数とした。

表1 有効回答であった園所数内訳

	幼稚園	こども園	保育園	計
回収数	13	65	18	96
回収数のうち 運動会実施 クラス	12	57	13	82

### 2) 調査項目

#### (1) 基本情報の質問項目

- ①所属園種：幼稚園・こども園・保育所（園）

- ②担当クラス：0歳児・1歳児・2歳児・3歳児  
4歳児・5歳児・異年齢児（乳児・幼児）

③2024年度運動会の実施の有無

④運動会の実施場所（園庭・園ホール・小学校・地域）

⑤運動会の実施時期（1学期または2学期）

**(2) 今年度の運動会を振り返っての15項目の設問**

設問項目を表2に示した。回答方法は、4点「非常にあてはまる」・3点「ややあてはまる」・2点「あまりあてはまらない」・1点「全くあてはまらない」の4件法での回答とした。

表2 設問の内容

1	自分の体を十分に動かそうとする意欲を持てた
2	取り組む中で自分の考えや思いを言葉にして伝えることができた
3	練習を重ねることのできるが増え、達成感をあじわうことができた
4	身近な大人とふれあうことで信頼関係を深めることができた
5	練習してきたことを人前で発表する経験ができた
6	親子種目を通して、一緒に身体を動かしふれあいを楽しめた
7	のびのびと体を動かし、運動することを楽しめた
8	様々な競技や種目を通して、喜びや悔しさなどいろいろな感情を経験できた
9	競技や表現に挑戦したり、成功をしたりすることで自信をつけることができた
10	友だちと力をあわせたり応援したりすることで協力する気持ちをあじわうことができた
11	異年齢間の交流が運動会前後にも深まった
12	子どもたちの主体性を尊重することができた
13	保護者に子どもの成長を感じられる機会の場を設けることができた
14	運動会で経験したことを言葉や絵で表現することにもつながった
15	保育者間で運動会のねらいについて話し合うことで協働性や同僚性が深まった

**(3) 自由記述の項目**

①身体表現のプログラムのねらいと内容・使用した曲・曲を選んだ理由・使用した道具等

②運動会の開催にあたり大変だと感じること及び課題と思う事2点

③コロナウイルス感染症の制限期間以前と制限解除後の運動会の運営や開催に関して変化した点、工夫した点

3) 調査時期：2025年1月

4) 観察対象及び観察時期

本学院の付属幼稚園、および同法人系列保育園、こども園の運動会の事前の練習や事後、そして当日における、2024年9月～11月の間、全体の園児たちの様子を観察記録した。

記録のポイントは、運動会に向けて過ごす子どもたちの姿、演目・競技の練習の持ち方、保育者の関わりや指導、子どもたちの様子、運動会後の子どもたちの変化とした。

5) 統計処理：データ分析はIBM SPSS Statistics ver.28.0.1.0 (142)を使用した。

### 3. 結果と考察

#### 1) 設問間の比較

t検定を用い、15項目を関連する領域別に分けその平均得点で比較した。1・3・7・9番を領域「健康」、4・6・10・11番を領域「人間関係」、8番を領域「環境」、2番を領域「言葉」、5・14番を領域「表現」とした。12・13・15番は領域外の項目として設定していたため個別のt検定を行った。図1は領域別の得点平均である。

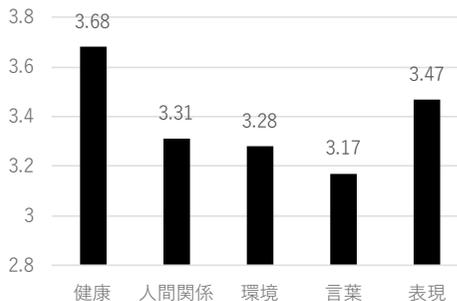


図1 領域別得点平均

表3 得点のt検定

	平均の差	標準偏差	t 値	自由度	有意確率
健康 - 人間関係	0.4	0.4	8.2	81	0.000
健康 - 環境	0.4	0.6	5.8	81	0.000
健康 - 言葉	0.5	0.6	8.0	81	0.000
健康 - 表現	0.2	0.4	4.7	81	0.000
人間関係 - 環境	0.0	0.7	0.4	81	0.695
人間関係 - 言葉	0.1	0.6	2.0	81	0.054
人間関係 - 表現	-0.2	0.5	-2.9	81	0.005
環境 - 言葉	0.1	0.8	1.3	81	0.191
環境 - 表現	-0.2	0.6	-2.9	81	0.005
言葉 - 表現	-0.3	0.6	-4.5	81	0.000
設問12 - 設問13	-0.5	0.6	-7.1	81	0.000
設問12 - 設問15	-0.2	0.6	-3.1	81	0.003
設問13 - 設問15	0.3	0.6	5.1	81	0.000

領域「健康」のねらいの達成度は、他のすべての領域と有意差があった。したがって「健康」領域の達成度は他の領域の達成度よりも高かったといえる（表3）。また、領域「表現」のねらいの達成度も他のすべての領域と有意差があった。領域「表現」の達成度は領域「健康」の達成度よりも低かったが、領域「人間関係」「環境」「言葉」のねらいの達成度よりも高かったといえる（表3）。

これらの結果から、運動会では領域「健康」のねらいが最も多く達成されたことがわかった。本研究で設定した健康の領域の設問は、運動と意欲・達成感・楽しさ・自信との関係であった。それらの内容は、非認知能力につながる経験であり、運動会の行事としての価値が確認されたといえよう。

また、設問12は「子どもの主体性の尊重をした」について、設問13は「保護者にとって子どもの成長を見る場になった」か、設問15は「保育者同士の協働性や同僚性を深めた」についての内容である。表3に示す通り、設問12（平均値3.28）と設問15（平均値3.47）、設問13（平均値3.80）と設

問15（平均値3.47）には有意差があった。したがって、「子どもの主体性の尊重をした」よりも「保護者にとって子どもの成長を見る場になった」方の得点が高いといえる。さらに「保育者同士の協働性や同僚性を深めた」よりも「保護者にとって子どもの成長を見る場となった」方の得点が高いといえる。すなわち、子どもの主体性や保育者同士の協働性や同僚性よりも、保護者が子どもの成長を見る機会になったとの回答が多く、運動会の「見せる」面での価値をより意識していると考えられる。それを裏付けることとして、領域「表現」の達成度が、領域「人間関係」「環境」「言葉」のねらいの達成度よりも高かったことがあげられる。すなわち、運動会における身体表現プログラムは、演じる子ども達にとっても、観ている保護者や地域の方たちにとっても、成長を感じられる機会としてとらえられているのではないかと考えられる。領域「表現」については、後述する自由記述の中でさらに詳しく分析する。

## 2) 園種の違いによる比較

一要因分散分析（3水準）により園種別の平均値の比較を行った。その結果、表4に示す通り、設問6「親子種目を通して、一緒に身体を動かしぶれあいを楽しめた」は園種の効果が有意であった  $F(2,4.862) = 6.602, p < .05$ 。多重比較によれば、幼稚園と保育園の間と、こども園と保育園の間に有意差があった。しかしながら幼稚園とこども園の間は有意ではなかった（表5）。すなわち、保育園では他の園種より親子の交流ができていたと捉えていたことが分かった。

また、表6に示す通り、設問10「友だちと力を合わせたり応援したりすることで自信をつけることができた」は園種の効果が有意であった（ $F(2,2.451) = 3.690, p < .05$ ）。多重比較によれば、幼稚園とこども園の間に有意差があった（表7）。すなわち、幼稚園では友達同士の関わり合いから自信をつけていると捉えていることが分かった。

これらの結果から、園種によって運動会における領域「人間関係」の達成内容が異なることが分かった。保育園の子どもは園で過ごす時間が長いこと、普段の生活の中でのふれあいの時間をおぎなうという意味から、運動会という特別な機会において子どもと保護者がふれ合い、関わり合えるような時間や機会を設けられるような種目が用意されていると考えられる。一方、幼稚園は年齢が高いため友だち同士で力を合わせ、考え作り上げていく種目・演目もあり、発表の場として練習してきた姿を披露する場となっていると考えられる。園種の状況に合わせて、運動会の人間関係のねらいを工夫し、大事にしていることが分かった。

表4 設問6のデータ表示

	幼稚園	こども園	保育園
平均値	2.70	3.54	4.00
度数	10	52	13
標準偏差	1.49	0.80	0.00

表5 設問6の多重比較の結果

	幼稚園	こども園	保育園
幼稚園		<	<
こども園			<
保育園			

不等号  $p < .05$

表6 設問10のデータ表示

	こども園	保育園	幼稚園
平均値	3.16	3.46	3.83
度数	12	13	57
標準偏差	0.39	0.88	0.86

表7 設問10の多重比較の結果

	こども園	保育園	幼稚園
こども園		=	<
保育園			=
幼稚園			

不等号 p&lt;.05 等号 n.s.

### 3) 担当クラスの年齢による比較

異年齢児の乳児と0歳児・1歳児・2歳児を「乳児」、3歳児・4歳児・5歳児を「幼児」として、得点の平均のt検定を行った。領域「人間関係」以外の4領域において有意差があった(表8～11)。4領域とも「幼児」の方が高い得点であったといえる。設問12.13.15には年齢別の有意差はなかった。

これらの結果から、設問4(身近な大人とふれあい信頼関係を深める)や設問6(一緒に身体を動かしふれあいを楽しむ)といった「人間関係」に関する運動会のねらいは、乳児と幼児に変わりがなかったことが分かった。「人間関係」以外の4領域では、その領域に関しての質問が設問9(競技や表現に挑戦)や設問8(いろいろな感情を経験)設問2(自分の考えや思いを言葉にして伝える)設問14(経験したことを言葉や絵で表現)といった内容であったため、乳児期よりも幼児期の方がこれらの内容において達成されたことがわかりやすい年齢であることから、幼児の方が高い得点となったと考えられる。このことから、本研究の設問内容が乳児から幼児にわたり、偏りがなかった設問内容ではなかったのではないかと考えられる。

表8 担当クラスの年齢による比較「健康」領域「健康」のt検定

	乳児	幼児
平均	3.68	3.82
分散	0.16	0.07
自由度	120.00	
t	-2.13	
有意確率	0.03	

表9 担当クラスの年齢による比較「環境」領域「環境」のt検定

	乳児	幼児
平均	3.29	3.60
分散	0.66	0.29
自由度	120.00	
t	-2.35	
有意確率	0.02	

表10 担当クラスの年齢による比較「言葉」領域「言葉」のt検定

	乳児	幼児
平均	3.18	3.38
分散	0.54	0.32
自由度	120.00	
t	-1.61	
有意確率	0.11	

表11 担当クラスの年齢による比較「表現」領域「表現」のt検定

	乳児	幼児
平均	3.46	3.69
分散	0.33	0.11
自由度	120.00	
t	-2.57	
有意確率	0.01	

#### 4) 運動会の実施場所による比較

運動会の実施場所の回答から、園庭・園内ホール・小学校（グラウンドや体育館）・地域（グラウンド・体育館・公園）の4カ所に分け、一要因分散分析（4水準）を行った。その結果、表12に示す通り5つの設問に有意差があった。それらの設問の基本データ図2に示した。

表12 運動会の実施場所による一要因分散分析

設問	自由度	平方和	F値	有意確率
設問4 身近な大人とふれあい信頼関係を深める	3	5.35	6.60	0.00
設問11 異年齢交流の深まり	3	14.20	7.59	0.00
設問8 様々な競技や種目を通した様々な感情の経験	3	6.53	3.81	0.01
設問5 練習してきたことを人前で発表する経験	3	2.58	3.07	0.03
設問14 運動会の経験を言葉や絵での表現につながる	3	11.87	8.17	0.00

p<.05

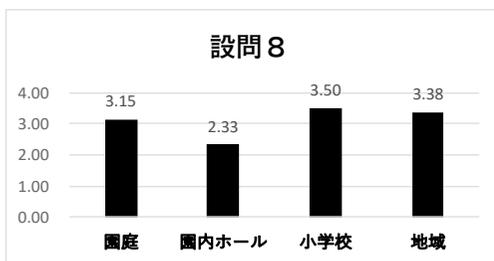
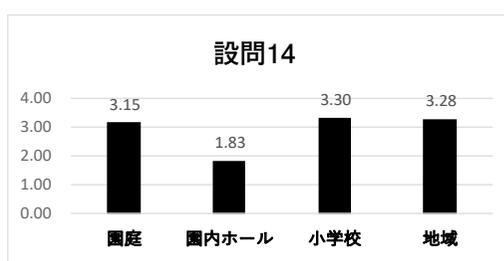
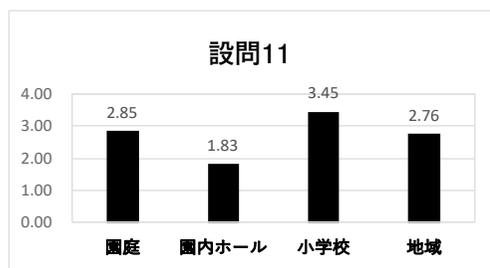
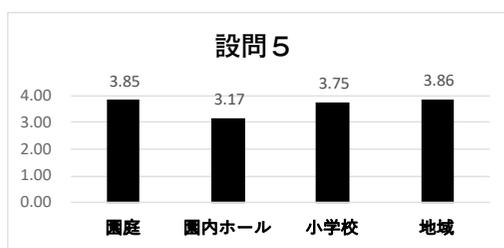
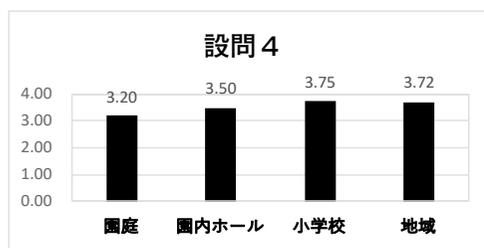


図2 運動会の実施場所による得点比較

LSD法を用いた多重比較の結果を表13に示した。

表13 運動会の実施場所による多重比較

設問		場所	園庭	園内ホール	小学校	地域
領域 「人間関係」	設問4	園庭			<	<
		園内ホール				
		小学校				
		地域				
	設問11	園庭		>	<	
		園内ホール			<	<
		小学校				>
		地域				
領域 「環境」	設問8	園庭		>		
		園内ホール			<	<
		小学校				
		地域				
領域 「表現」	設問5	園庭		>		
		園内ホール			<	<
		小学校				
		地域				
	設問14	園庭		>		
		園内ホール			<	<
		小学校				
		地域				
不等号p<.05 空欄はn.s.						

設問4（身近な大人とふれあい信頼関係を深める）では、園庭よりも小学校や地域での実施の得点が高かったといえる。

設問11（異年齢交流の深まり）では、園内ホールよりも園庭、小学校、地域での実施の得点が高く、地域よりも小学校の実施の得点が高かったといえる。

設問8（様々な競技や種目を通した様々な感情の経験）や設問5（練習してきたことを人前で発表する経験）及び設問14（運動会の経験を言葉や絵での表現につなげる）では、園内ホールよりも園庭、小学校、地域での実施の得点が高かったといえる。

これらの結果から、より広い場所での実施が、人とのふれあいや交流を深め、様々な競技内容を経験でき、その後のあそびや学びにつながっていたことが分かった。交流種目や親子競技プログラムの実施、のびのびとした配置での競技や準備、保護者等の見学席確保等、より広いところで行う

ことが運営もスムーズに行えると考えられる。実際は自園の園庭の広さや園児数、保育者数、地域との連携の在り方なども理解しながらの運営になり、できる範囲の中での運動会にならざるを得ない。しかしながら、その中でも運動会という行事をその日一日のイベントとして考えるのではなく、運動会で何を子どもに経験させたいか、学ばせたいかという園の目標を意識することが最重要視される必要があるのではないかと考える。

## 5) 運動会の開催時期別の比較

運動会の開催時期別に、各領域の回答得点のt検定を行った。その結果、開催時期の間には有意差はなかった。開催時期については、後述する自由記述の中で天候との関係から分析をする。

## 6) 自由記述の分類

### (1) 質問Ⅲ自由記述欄の分類

「身体表現のプログラムの有無」について乳児と幼児別の回答数を表14に示した。

表14 身体表現プログラムの有無

	乳児			幼児			計
	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	
あり	2	5	8	12	17	16	60
なし	3	2	5	2	3	3	18
未回答							4
合計							82

表14から、乳児クラスと幼児クラスを比べてみると、幼児クラスではほとんどのクラスに身体表現プログラムがあるのに対し、乳児クラスは少なくなっている。乳児クラスは、広い場所での運動会ではなく、参観などの別の機会で行うこともある。また、歩行できない年齢であるので身体表現ができないと捉えている回答もあった。「身体」を上手に動かさなければ身体表現プログラムはできないのではないかと身体表現のイメージを固定化しないで、乳児の身体表現プログラムも充実させていく必要がある。

次に、「身体表現のプログラムのねらいと内容・使用した曲・曲を選んだ理由・使用した道具等」について分析を行い表15に示した。

表15 身体表現のプログラムの乳児と幼児の比較

設問1. どのようなねらいでどういった内容をされていますか。

設問2. どのような音楽を使われていますか。使われた曲名を教えてください

設問3. なぜこの曲を選ばれたのですか。

設問4. 表現する際に使用した道具があればご記入ください例) ポンポン・バルーン・鳴子など

	乳児 0, 1, 2歳児 14の回答中、複数回答あり	回答数	幼児 3, 4, 5歳児 44の回答中、複数回答あり	回答数
設問1.	①親子との触れ合いを楽しむ	7	①友だちと力を合わせる	24
	②全身を動かして楽しむ	3	②体を動かすことを楽しむ	16
設問2.	同じ曲はなし	7	最高到達点	5
設問3.	子ども達の好きな曲、親しみのある曲だから	5	子ども達の好きな曲、馴染みのある曲だから	10
設問4.	なし	7	①バルーン	16
			②リストバンド	8
曲のテンポ	平均J.133		平均J.122	
曲の調	へ長調	7	二長調	10

身体表現プログラムのねらいについて、乳児クラスでは親子との触れ合いを大切に、体を動かすことを共に楽しむという記述が多かった。また幼児クラスでは友だちと力を合わせる、協調性を育むことをねらいとする記述が多かった。

曲の平均テンポについては乳児J = 133幼児J = 122であり、乳児の方が平均のテンポが速かった。乳児の平均テンポが速いのは、速いテンポの方が刺激があり、速いので逆にテンポやリズムに感じるのではなく、感覚に任せて自由に動けるからなのではないかと思われる。感覚で動く乳児の身体の特徴を意識できていると思われる。

幼児のプログラムに多く使用されている曲のJ = 126のテンポは、J = 120のマーチテンポ（歩きながら演奏する行進に合わせて、規則的なリズムと楽節構造を持ち、通常2拍子または4拍子のテンポ）に近い。幼児になると、音楽に合わせてリズムを取ったり、音楽に合わせて表現したりすることができるため、歩きながらリズムが取りやすく、表現演技がしやすいテンポに近い曲が使用されていると思われる。

音楽の調に関しては、乳児期はへ長調が7曲と最も多く、幼児では二長調が10曲と最も多かった。どちらも生活の歌や、季節の歌など園生活の中で歌われている歌で幼児が歌いやすい音域でよく用いられる調の曲が選曲されていた。

乳児、幼児、ともに子どもたちが好きな曲、耳馴染みのある曲を使用している回答が最も多かった。普段の保育現場で歌われている子どもたちが好きな曲を使用することで、普段の遊びで聞き知った曲で表現することが、子どもたちの自然な表現につながるのではないかと考えられる。日頃歌っている曲や、聞いたことがある曲を使い、日常の保育の中の遊びから身体表現へ、普段の保育の中で練習しやすい環境にあることで、身体表現を遊びのなかから運動会という特別な場というものを意識しつつも、子どもにとって楽しく取り組めるプログラムを組まれていることが考えられる。さらに幼児クラスでは、バルーンなど、保護者から見られることを意識したプログラムも行われていた。

## (2) 質問Ⅳ自由記述欄の分類

「運動会の開催にあたり大変だと感じること及び課題と思うこと2点」について、記入された自由記述を分類しその件数と主な内容を表16に示した。

表16 運動会の開催にあたり大変だと感じること及び課題と思うこと

記述内容	件数	内容
運営	22	自園での開催ではないため、運動用具を運んだり当日に会場を準備したりすること たくさんの方が集まる中での、不審者等の安全管理
		職員が少なく事前準備や当日の運営なども一人一人の役割が多く負担が大きい
暑さ対策	32	暑さ対策のため、テントやミストの設置など環境作りや短時間で練習するための計画 暑さが厳しい時期が年々長くなってきていて、外での練習がなかなかできなかったり、 熱中症にならないように配慮したりすること
		暑い日が続き、室内での練習がメインになり、園庭での練習は短時間や水分補給をする など配慮しながら行っている
準備	18	使用する運動器具などの運搬手配 当日の天候次第で準備や段取りが変わるため（雨天時体育館）直前まで持ち物や役割な ど決定できず当日バタバタする
		競技に必要な準備物の制作
練習	23	連級、入園したばかりだったので落ち着きがあまりなく、練習時間が短かった 自分の園ではなく近くの小学校の運動場での開催だったのでリハールもなく、子ども たちはぶっつけ本番だった
		子どもたちの気持ちを高めて、当日まで盛り上げること
内容	17	子どもの主体性を尊重できる競技や演目にするにはどうしたらいいのか 楽しさプラス成長を見てもらえる場、西方兼ね備えた内容を考えること
		一人一人の特性に合わせた対応の仕方
保護者対応	14	保護者席の設け方や開場までの並び方など、ルールを守ってもらうよう周知し促すこと 子ども達全員が保護者の満足のような成長を見せられるかという点
		新しいことに取り組むうえでの保護者からの理解

最も記述が多かったのは、「暑さ対策」に関することであつた。その背景であると考えられる気象変動などに関しては、後述(③)するが、暑さにより運動会の日程自体を考えていかなければならないこと、テントやミストなどを設置するなどの環境を整えること、そして子ども達と保育者の熱中症予防のために練習時間や場所を配慮しなければならないこと、といった多側面からの記述がされており、近年の暑さに関わる問題は乳幼児の運動会においても大きな課題となっていることが分かる。

他に件数が多かったのは、「練習」「運営」に関することであつた。詳細は後述(④)するが、園児数・観覧人数に対応するため等の理由でより広い場所が必要となり自園以外での開催している園にとっては、「練習」「運営」において大変であるという記述が多く見られた。このような記述は「準備」や「内容」にも通ずるものがあり、分類してはいるがどの項目も相互関係があることが分かる。

また「内容」においては、子ども達の主体性を尊重、一人一人の特性に合わせた対応、といった記述があり、主体性を重んじ多様性に対応した運動会を目指す園がある一方、伝統やその園ならではの特色を重んじ、見せる機会として捉えている園もある。運動会が子ども達の成長を見せよう場としてのねらいをもつものの、子どもたちの主体性を重んじる事との兼ね合いの中で、園種や年齢によって様々な取り組みを試行錯誤していることがうかがわれる。子ども達にとってよりよい運動会を考えていくための今後の課題として挙げられると考える。

## (3) 熱中症対策について

運動会を開催するにあたり、熱中症対策に苦慮しているという回答が多かった。昨今、全国各地

の園、学校等で運動会の練習や運動会当日に熱中症による緊急搬送などが相次いでいる。熱中症を引き起こす環境条件には、気温が高い、湿度が高い、日差しが強いなどの環境条件のほか、乳幼児や高齢者、暑さに慣れていないなどの体の条件、長時間の屋外作業などの行動の条件がある。これらの環境条件の中で、体から熱が放出されにくくなることで熱中症が発生しやすくなる。

本研究の調査協力園の所在地の中で最も多いN市の例をあげ、N市の気温に関する2011年と2024年の統計を表17に示した。園が運動会を実施している月は9月と10月に行われることが多い。2011年と2024年の最高気温や最低気温、猛暑日（35°以上）真夏日（30°以上）夏日（25°以上）を比較してみると、明らかに気温は上昇しているのが分かる。

表17 気象庁 N市の気温に関する統計より作成

2011 年	最高気温			最低気温			猛暑日	真夏日	夏日
	最高	平均	最低	最高	平均	最低			
1月	9.6	7.5	4.0	0.4	-1.7	-4.2	0	0	0
2月	19.0	11.8	2.4	7.6	-0.1	-4.0	0	0	0
3月	21.7	12.6	6.7	7.5	0.9	-2.7	0	0	0
4月	27.5	19.4	10.9	12.4	5.1	-1.4	0	0	1
5月	29.7	23.8	16.5	18.8	13.0	8.5	0	0	12
6月	34.7	27.5	18.0	25.1	19.2	14.9	0	9	8
7月	35.5	31.5	25.3	25.5	22.6	20.0	1	23	7
8月	36.1	32.8	25.9	26.6	23.6	21.8	6	21	4
9月	33.6	28.6	22.0	24.5	19.2	11.2	0	12	10
10月	26.7	22.7	18.2	18.6	12.5	5.8	0	0	5
11月	25.0	17.7	12.8	17.3	8.4	1.5	0	0	1
12月	18.2	10.9	7.0	11.1	1.8	-2.3	0	0	0
年間	36.1	20.6	2.4	26.6	10.4	-4.2	7	65	48

2024 年	最高気温			最低気温			猛暑日	真夏日	夏日
	最高	平均	最低	最高	平均	最低			
1月	14.1	10.3	4.9	8.1	1.5	-2.1	0	0	0
2月	19.3	11.6	5.1	10.9	3.2	-0.5	0	0	0
3月	24.1	13.4	7.6	12.1	3.8	-1.3	0	0	0
4月	29.9	22.8	15.8	17.2	12.1	3.8	0	0	9
5月	30.0	24.8	17.3	18.4	13.2	6.1	0	1	17
6月	34.5	28.7	21.9	24.1	18.9	13.3	0	12	15
7月	37.2	33.7	26.6	27.0	25.1	21.5	15	11	5
8月	38.4	35.0	26.8	27.1	25.2	22.9	21	8	2
9月	35.9	32.8	26.8	26.9	23.5	18.8	11	11	8
10月	31.5	25.6	17.7	21.3	16.9	10.6	0	3	16
11月	25.1	18.5	11.8	16.7	9.5	5.4	0	0	1
12月	18.9	11.7	8.1	7.1	3.1	-0.9	0	0	0
年間	38.4	22.4	4.9	27.1	13.0	-2.1	47	46	73

表17が示す通り、9月10月の運動会シーズンであっても熱中症のリスクが高くなるのがわかる。また、猛暑日や真夏日、夏日の日数の比較をすると、2011年の9月は猛暑日0日、真夏日12日、夏日10日。10月は、猛暑日0日、真夏日0日、夏日5日であったのに対して、2024年の9月は猛暑日11日、真夏日11日、夏日8日。10月は猛暑日0日、真夏日3日、夏日16日であった。特に2024年の9月においては、すべての日が夏日以上、10月も7割の日が夏日以上であった。

全国においても、2024年9月の平均気温は、10年前の7月8月の平均気温に相当している。特に猛暑日や真夏日が連日続いているため、運動会の9月開催は危険リスクが高いと考えられる。また、10月平均気温は10年前の9月の気温に相当しており、猛暑日や真夏日も少なくなってきた。

熱中症は、気温だけの条件ではなく、体温を調節する機能に大きく関わる「気温」「湿度」「輻射熱」が関係している、このような環境状況下の中において、運動会の練習や本番においては、次に示した3点（①～③）の熱中症対策を万全に講じながら行う必要がある。

- ① 暑さ指数（WBGT）を活用し、暑さ指数が警戒レベル等に達している場合は、内容や強度を変更したり、休憩時間をこまめに入れたりしながら練習などを行っていく必要がある。また、リズム室などの空調システムなどが完備されている部屋での練習や気温が低い時間帯での活動など時間や場所などを工夫していく必要がある。
- ② 時間帯を工夫する場合は、練習期間には運動できる服装での登園を実施したり、少し早めの登

園が出来るようにしたり等、保護者の理解と協力を得ることも必要となる。

- ③ 寝苦しい夜も多く、冷房を入れての就寝や、昼夜の気温差から体調を崩しやすい園児もいる。そのため、登園時の園児の体調チェックを正確にする必要がある。口頭だけの聞き取りでは漏れ落ちが出てくる可能性があるため、ICTの機器や保護者との連絡アプリなどを利用し、出欠や遅刻早退の確認や・体温・体調・食事の状況・排便等を入力してもらい、職員全員が情報を共有できるようにする。そのためにも保護者との連携や協力が不可欠であり、日ごろからスムーズなコミュニケーションを図る必要がある。

#### (4) 運動会の運営

運動会を行う場所として、自園の園庭で行っている園や近くの小学校や中学校の運動場や自治体や行政が管理するグラウンドや体育館などを使用している園など多様であった。空調システムのある体育館等で開催する場合には、熱中症のリスクは軽減され、天気に左右されることが少ないため計画も立てやすいことが利点である。ただ、空調システムがある体育館等での開催であると、練習は各自園で行うが、本番は初めての会場となることがあり、園児の動揺や指導者等もなれない場所での開催に手間取ることも多くスムーズに運営できない懸念がある。また準備や後片付けも当日の限られた時間で行わなければならないことで負担があるとの回答があった。

体育館を利用することにおいては、費用面や場所の借りられる日にちに限りがあるため厳しい面もあるが、リハーサルなどを含め前日から借りられるようにしたり、準備や後片付け等の時間を考慮し、貸し出してもらえる時間を早めてもらったりするなどのシステムを行政や地域団体と交渉していく必要があると考えられる。自園独自の条件を見極めながら、実施場所を選択し、ねらいに見合った種目等を検討しながら、無理なく行えるようなプログラムの編成にしていく必要がある。

また、準備や後片付け、進行などにもスタッフを増やすことによって時間の短縮を図れると考えられる。今後、保護者、地域の方々だけでなく、保育養成校の学生ボランティアにも協力してもらいながら運動会をスムーズに運営できるようにしていくことも視野に入れながら行っていくことも可能ではないかと考えられる。

#### (5) 質問Ⅴ「新型コロナウイルス感染症の制限期間以前と制限解除後の運動会の運営や開催に関して変化した点、工夫した点」の自由記述の分類

自由記述の回答から、コロナ期に様々な制限があったことで変化や工夫をした点を〈時期・場所〉〈運営、プログラム〉〈観覧〉〈競技・演目〉に分類して以下の表18に示した。

表18 コロナ期に様々な制限があったことで変化や工夫をした点

時期・場所	9月開催だったが練習時間が外では暑くなかなか練習できなかったので、7月に開催したことで練習時間も確保できた。
	時期についてはコロナ禍関係なく、暑さがましになる10月下旬に変更した。
	コロナを機に場所を天候関係なく体育館で行うことに決めた。
運営プログラム	暑さの問題もあり、5月に行い午前中で終わるように変化していった。
	コロナ前は乳児クラスも広いグラウンドを使っていたが、コロナ渦より乳児クラスの運動会は自園の園庭で行っている。
	コロナの時は幼児と乳児で運動会の日をわけた。制限解除後は乳児は2歳児のみ運動会に参加する形になった。
観覧	親子競技をしていたが、今年は子ども主体の種目で行ったので親子競技ではなく親子ふれあい体操に変更した。
	全学年通しではなく学年ごとの発表会にしている。解除後もそのままの運営にしている。
	規模を縮小、短時、二部制にしたりしたが昨年度に戻した。以前の形が当園らしいと考え元通りにし今後も行っていくと考えている。
競技・演目	コロナ禍前は1-5歳児で開催していたが、クラスごとの運動遊び参観（園のホールで開催）を経て現在は3-5歳児での開催に変わった。
	立ち見という体制に変えたため、早朝からの場所取りもなくなり、子どもの演技を多少移動しながらでも見てもらえるようになった。
	クラスごとに時間帯を分け人数制限があった。現在は同時に行い人数制限も設けていない。
観覧	コロナ禍をきっかけに子ども1人につき2名までの来場とした。
	保護者席を自由席から指定席に、学年ごとの入れ替え制にした。
	1クラス2種目ほどに変更、コロナ後もそのまま継続。
演目	親子、保護者、来賓の方々の競技をなくすことで、子どもたちのみにスポットを当てることに徹底した。
	卒園児競技や来賓競技など園外の人と接触のあるプログラムが見直された。
	練習をつまかさねて行うものでなく、日頃から行っているものを取り入れる。
観覧	親子、卒園児、未就園児の競技をなくし、在園児のみになった。

これらの結果から、コロナ期に変化、工夫した内容が制限解除後も変化し工夫した形態で開催していることが分かる。コロナ期においては、各園様々な工夫、配慮をした運動会を行っており、コロナ期にやむを得ず取りやめたり、縮小したりをせざるを得なかった競技や演目もあった（岡澤,2023）。しかしこのことがきっかけとなり最低限の種目であっても工夫によって満足感を得られることもあると分かった。そのため、制限解除後、近年の気候の状態による暑さとも相まってコンパクトではあるものの、子ども達の様々な達成感はもちろんのこと、保護者はじめ観に来られた方々にも満足感が感じられるような形へと変化しているのではないと思われる。

制限があったからこそどうしても見てもらいたい、伝えたいという競技や演目を考慮した結果、絞られたプログラムでの運動会であっても子ども達の成長を感じられる機会となり、保護者からも評価を得ることができたのではないと思われる。それをふまえて、コロナ後に新しい形態の運動会として開催している。一方、園独自のスタイルや園ならではの競技や種目に対して、その園らしさにこだわりコロナ期前の形へと戻しているといった回答もあり、運動会は大きな行事であるがゆえに園の運営、特色等に関わるため多様になっていることもうかがえる。

すなわち、感染症対策として行われた運動会の変化や工夫が、現在の幼児教育・保育の変容、保護者のニーズや考え方といった多側面とマッチしていく部分を発見していくことで新しい時代の運動会の課題が挙げられていくのではないだろうか。

## 7) 観察記録

本学院の付属幼稚園、および同法人系列保育園、こども園の運動会の本番や、事前の練習や事後の全体の園児たちの様子を数週間観察すると、いろいろな変化や成長を感じられる場面があった。

系列のこども園において夏休みあけの9月から運動会にむけて過ごす子ども達の姿を観察した。普段の保育の中で運動会に使用すると見通した楽曲が流れる中、子ども達は保育者と体を動かしたり、一緒にリズムを取ったりして過ごしていた。しかし子ども達の中には、そのような雰囲気にな

じめなかったり、自分の思ったままの活動を続けていたり、うまくまとめることが出来ない状況もあった。また太鼓の音に驚き顔をこわばらせる子どもや振り付けを覚えられず泣き出して練習に参加できない子どももいる状況も見られていた。そのような中ではあるが、子ども同士のつながりや保育者の関わりから少しずつ運動会へ期待を持ち、楽しみにして向かっていく姿を見ることができた。

運動会を終え、直後の週明けから子ども達全員が運動会の続きを行っている様子を観察した。5歳児が行なっていたりレー競技を3歳児や4歳児の園児たちが見様見真似で行い、みんなが楽しく遊んでいる様子が見られたり、各クラスのダンスを3, 4, 5歳児の子どもたちが一緒に踊ったりするなど、異年齢の交流が自然と行えるようになってきていた。特に5歳児においては、その中心となって、年下の子どもたちにいろいろなことを優しく教え、いろいろな物を譲ってあげる場面も多くみられるようになった。

また、3歳児の園児が友だちの集団遊びに入れず、寂しく遊んでいる姿を5歳児の園児が見つけ、数人で声をかけ話しを聞き、みんなの輪に入りたいことを聞き、みんなのところに連れて行くなど、園児同士で問題を解決する力などもついてきたように感じられた。最年長としての自覚や自信、仲間意識等の力や感覚が備わってきたと考えられる。3歳児では、移動する際に一緒に行こうと声をかけ手を繋いで行く園児が増え、個別遊びしかしていなかった子どもたちも集団遊びをするようになった。

#### 4. まとめ

本研究は、乳幼児期における新しい時代の運動会に向けた今後の課題を見出だすことを目的として行われた。

N県及びK府O府の公私立の幼稚園・保育園・認定こども園26園を対象とした郵送による調査における、20園82名の有効回答から運動会の達成度の統計的分析と全回答の自由記述の分析、および同法人系列の運動会前後の観察を行った。その結果、乳幼児期における新しい時代の運動会に向けた今後の課題について次のようなことが明らかになった。

- 1) 運動会では、領域「健康」のねらいが最も高い達成度を示した。本研究では、意欲・達成感・楽しさ・自信等の非認知能力と運動との関係を表す達成感を質問項目とした。保育現場では、運動会という行事を運動能力だけではない総合的な価値を認識していることが明らかとなった。このことは今後も忘れてはならないものであると思われる。
- 2) 子どもの主体性や保育者同士の協働性や同僚性よりも、保護者が子どもの成長を見る機会になったという達成度が高かった。また、領域「表現」の達成度が、「人間関係」「環境」「言葉」の達成度よりも高かった。それは運動会の身体表現プログラムが園児も保護者も成長を感じられる機会としてとらえられていたからであろう。このことから、運動会において成長を感じられることは望ましい経験であるが、子どもの主体性や保育者同士の協働性や同僚性に関する経験もできるようなプロセスを工夫することが課題であると思われる。
- 3) 乳児に関しては、運動会における明確な課題が読み取れなかった。本研究の設問が不十分であったと考えられる。しかしながら、身体表現プログラムにおいては音楽面で乳児の特徴を捉えな

がら実施している様子が自由記述から明らかになっており、今後は乳児の身体表現能力の捉え方を柔軟にして実施していくことが望まれる。

- 4) 近年の気象状況からみて、熱中症対策を万全に講じながら行う必要があることが明確である。また、気象状況をマイナスに捉えず、保護者や地域の協力を求め、社会資源やボランティア等に頼ることも、練習や運営上の困難の解消になる方法だと思われる。
- 5) 感染症対策を講じた運動会における変化や工夫をふまえて得た本来の運動会の在り方を意識化することが必要である。そのことと、現在の幼児教育・保育の変容、保護者のニーズや考え方、運動会で何を子どもに経験させたいか学ばせたいかという園の目標などの多側面とがマッチしていく部分を発見していくことが新しい運動会に向けて望まれる。

## 謝辞

調査にご協力いただきました園所の保育者の皆様に、心より感謝申し上げます。また、帝塚山大学教授清水益治氏、帝塚山大学名誉教授岡澤哲子氏におきましては、本研究を進めるにあたって貴重なご助言をいただきました。心よりお礼申し上げます。

## 引用文献

国際連合広報センター（2023,7,27）記者会見による国連事務総長発言

[https://www.unic.or.jp/news\\_press/messages\\_speeches/sg/49287/](https://www.unic.or.jp/news_press/messages_speeches/sg/49287/)

（参照2025,1,23）

柴崎正行（1992,1993）なぜ幼稚園で運動会をするのか. 幼児の教育92（10）.10-18.

## 参考文献

気象庁（2024）気候変動監視レポート2023

箕和潤子（2017）戦前幼稚園における運動会の教育的意義に関する一考察.武蔵野教育學論集.33-9.

岡澤哲子（2023）コロナ禍における幼稚園・保育所の運動会の実態について.帝塚山大学子育て支援センター紀要.第4号.

柴崎正行（1992,1993）なぜ幼稚園で運動会をするのか. 幼児の教育.92（10）.10-18.